

第2回「水と火の祭」開催

水と火と人の輪



▲熊野大社・熊野高裕宮司による神事

熊野大社・熊野高裕宮司による神事



「水の日」の8月1日、八雲志人館は、第2回「水と火の祭」を開催しました。

「水の神様、火の神様、そして先人に感謝し、平和を創る」という祭の趣旨にふさわしく、会場には女性初のノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナーの2体の像も建てられ、かがり火に照らし出されました。

主会場は松江市八雲町の意宇川ほとり、イザナミ御陵の対岸にある水の偉人・周藤彌兵衛翁像周辺。

かつて、村人たちが、戦場に赴く若者を見送った場所です。

会場には、午後4時前から親子連れ中心に人々が集まり始め、ふるまわれた「かき氷」を楽しまれていました。

午後6時、日本の「火の出初（でぞめ）の社」として知られる出雲国一の宮・熊野大社の熊野高裕宮司による神事から始まりました。



神戸川太鼓



山根敏男さん

神事の締めめの餅まきの後、会場に勇壮な太鼓の音が轟きました。出雲市古志町の「神戸川太鼓」の演奏です。冒頭演じられたのは、同町の江戸時代の水の偉人・大槻七兵衛翁の業績をたたえる「七兵衛太鼓」。そして「HIRYU」。

「宴」と続き、普段は看護師をしているという女性の、力強い大太鼓演奏もありました。

「彌兵衛翁像の前で叩かせてもらって感激しました。彌兵衛さんと七兵衛さんという、水に関わる先人のつながり、因縁を感じ、ありがたかったです。かがり火もあつて気分が盛り上がりましたし、祭に集まった皆さんの温もりも伝わってきました。代表の来間和生さんの感想です。

太鼓演奏の余韻が漂うなか、小松電機産業株式会社・人間自然科学研究所の小松昭夫代表が挨拶に立ち、「今から300年ほど昔、彌兵衛翁は56歳で一念発起し、97歳まで42年間、剣山の固い岩を切り続け、切通しを完成させ、村を洪水の苦しみから救い、102歳で大往生されました。その志を現代によりみえらせ、翁ゆかりのこの地を平和環境健康の聖地（メッカ）にしようではありませんか」と呼びかけました。

続いて、会場に朗々と響き渡ったのは、全国相撲甚句会副会長の山根敏男さんによる相撲甚句。相撲の始祖は出雲の国の野見宿禰（のみのすくね）と言われています。『日本書紀』に、紀元前23年、出雲の野見宿禰と大和の当麻蹴速（たいまのけはや）が、わが国で初めて相撲をとって、野見宿禰が勝ったと書かれています。相撲と出雲の縁は深いのです。



「八雲なでしこ」連

祭の締めくくりは、地元「八雲なでしこ」連の17名による「松江だんだん踊り」。しつとりとした曲と踊りですが、飛び入り参加もあり、踊りの輪が広がって、いかにも祭らしい雰囲気になりました。

なお、神事に先立ち、午後3時半から、日吉ふれあい会館で「夏休みチャレンジ・スポーツ吹矢体験」も開かれました。参加したのは子ども25名、大人6名の計31名。日本スポーツ吹矢協会出雲支部・大福利彦支部長をはじめとするメンバーから、スポーツ吹矢の基本動作を手ほどきしてもらったと、すぐにゲーム（3ラウンド）が始まり、参加者には花火セットなどの記念品が贈られました。

大福支部長は「初めての体験で、とくに子どもたちが夢中になっていました。この競



スポーツ吹矢

技は健康が目的ですから、腹式呼吸法など事前練習から取り組んでもらいます。次の機会には、あと1時間いただければ、もっとゲームを楽しんでもらえると思います」と、次回への期待を語りました。

第2回「水と火の祭」は、八雲ゆう人会の協賛、まつえ南商工会八雲支部、日吉地区自治会連合会、八雲公民館、松江市教育委員会、小松電機産業株式会社の後援を得、町内外の約200名の皆様にご参加いただきました。祭の模様は、地元紙・山陰中央新報（8月17日付）でも報じられました。

来年もより充実した地域の祭にしたいと念じておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。